

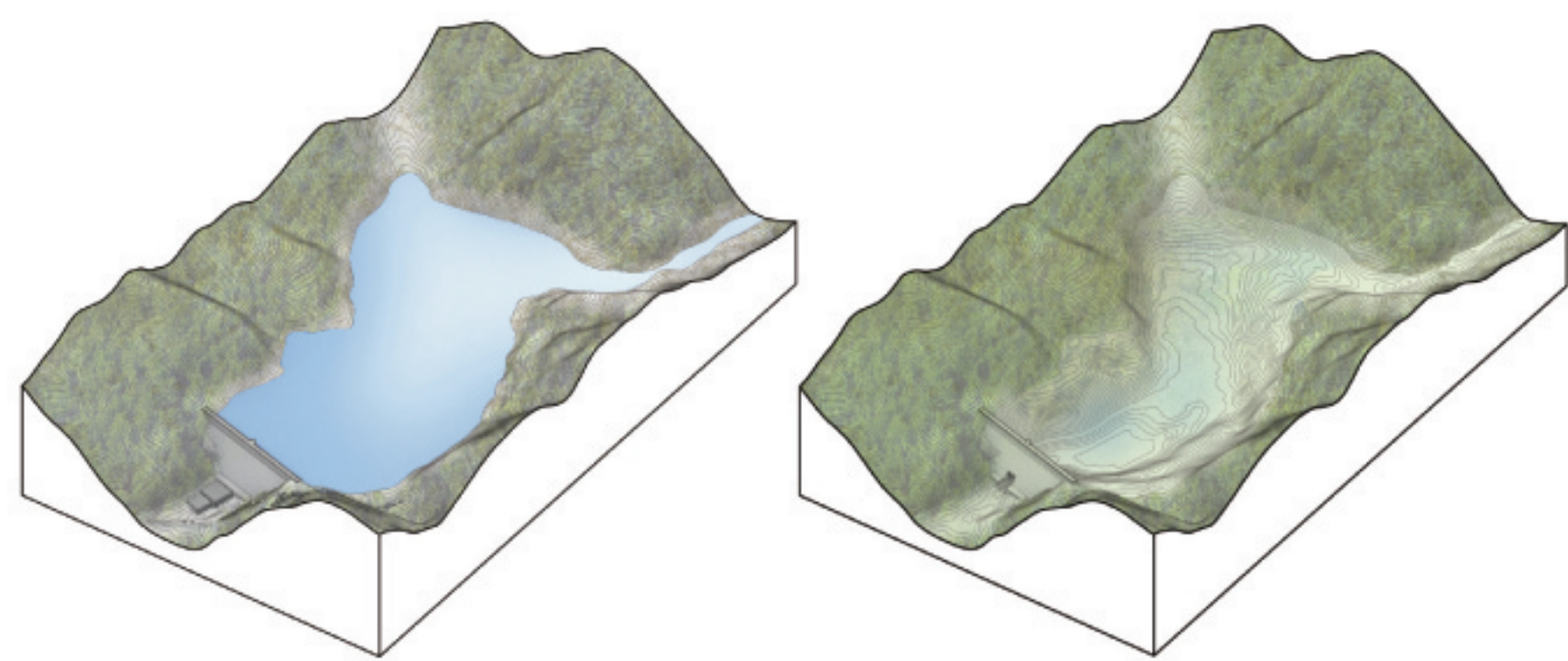
神戸大学建築卒業設計賞 大賞

久遠の環—神戸・布引ダムの転生—

塚越仁貴（遠藤研究室）

全国各地のコンクリートダムが更新期に差し掛かりつつあるなか、解体や転用の方策が模索されている。
将来的に機能の終了が予測される近代化遺産「布引ダム」において、ダムの転生を提案する。
貯水を終了し、湿地化した環境のなかで、湛水域、かつて水に浸かっていた周囲600Mの環に、観光施設、
研究拠点、そして、100年以上続いたこの地の記憶、現象、体験をメモリアルするミュージアムを提案する。



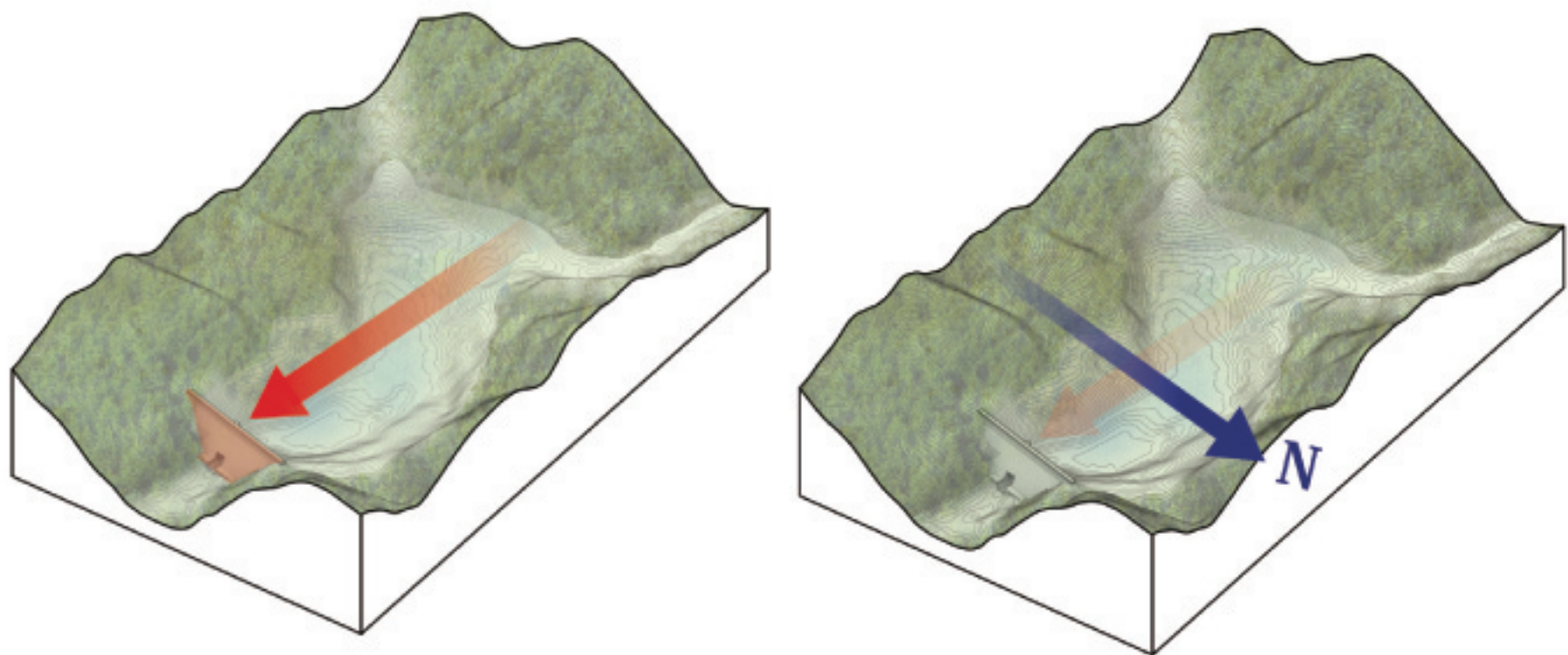


湛水域 / WL=210.5M

周囲 600Mの人工的な水面は
100年以上自然の中に存在し続けてきた。

貯水の終了 / 湿地への転生

堤体に穴をあけ、貯水を終了し、一帯を湿地化整備する。
ダムが果たしていた治水機能を引継ぎ、
グリーンインフラへの転換が果たされる。



直交軸

ダムの象徴である堤体に対して直交する軸

南北軸

神戸において山と海、山と都市を貫く軸



神戸大学建築卒業設計賞 木南賞

移ろいを彩る－夙川における駅の在り方－

仲川絵理（末包研究室）

ずっと感じてきた駅への違和感。それは、駅がどこに行っても同じ形、同じ内容で、「この場所に来た」という感覚が無くなってしまっていること。しかし、駅とは本来多くの人々が集まる公共的な場所、また、街へのゲートでもあり、その土地らしさが最も表れるべき場所であると考え。そこで、駅という機能のみが街に押し込められている現状を考え直し、失われたその土地らしさを表出させ、人々のコミュニケーションや文化的な活動の中心となるような駅を提案をする。

移ろいを彩る－夙川における駅の在り方－

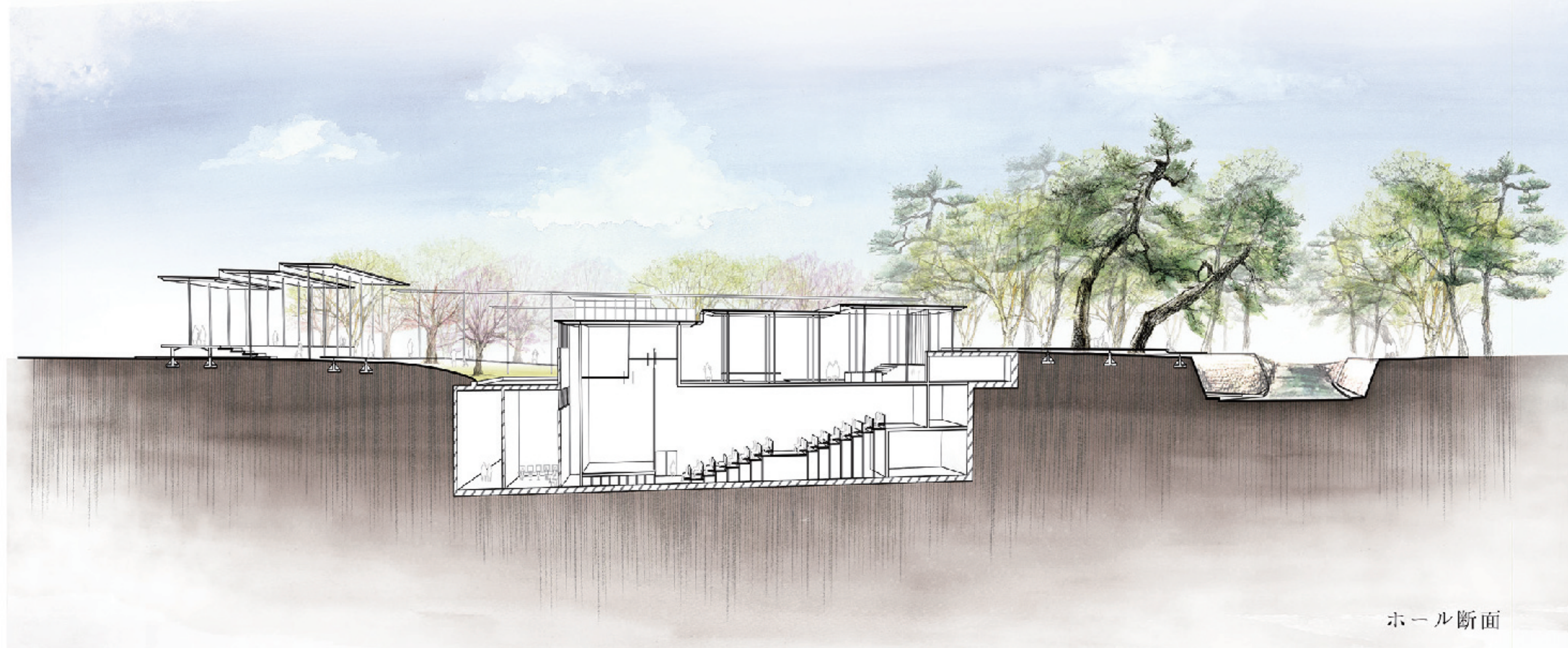
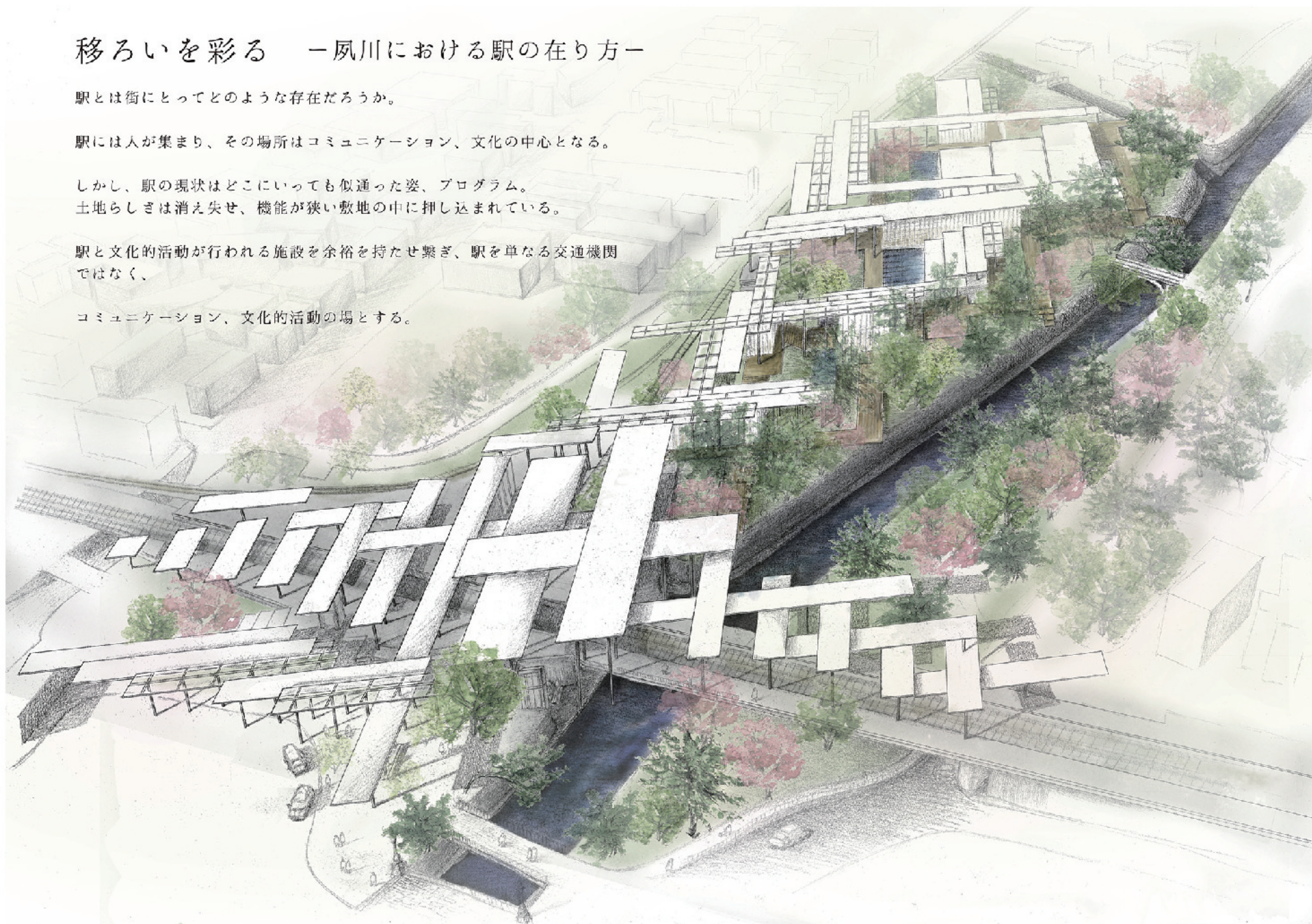
駅とは街にとってどのような存在だろうか。

駅には人が集まり、その場所はコミュニケーション、文化の中心となる。

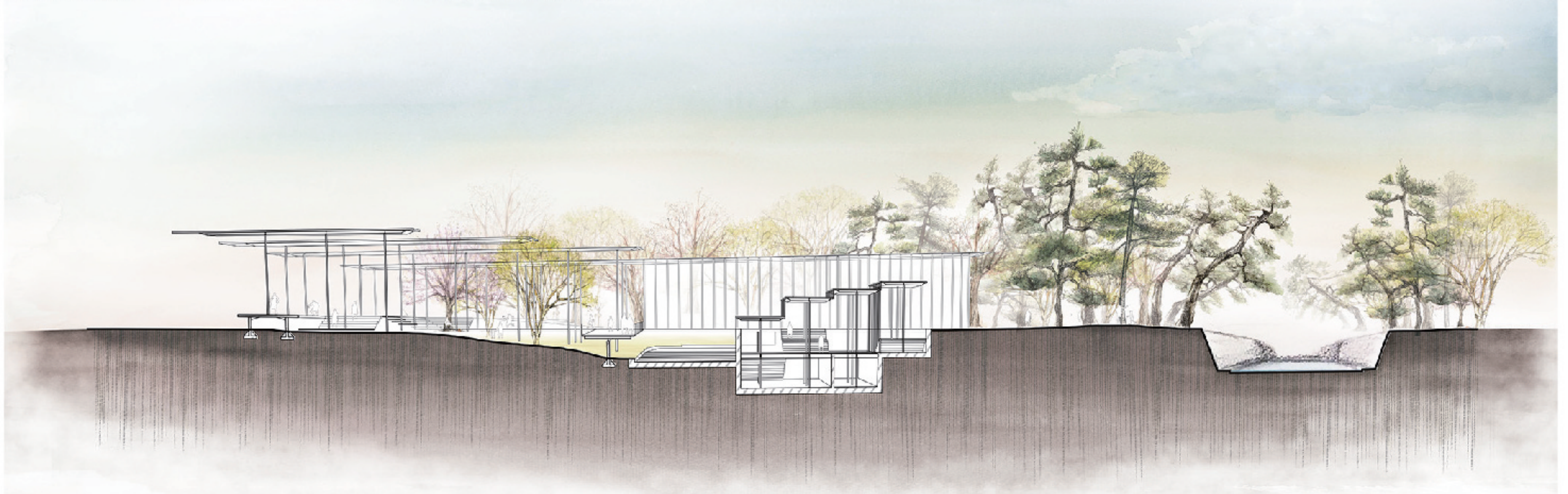
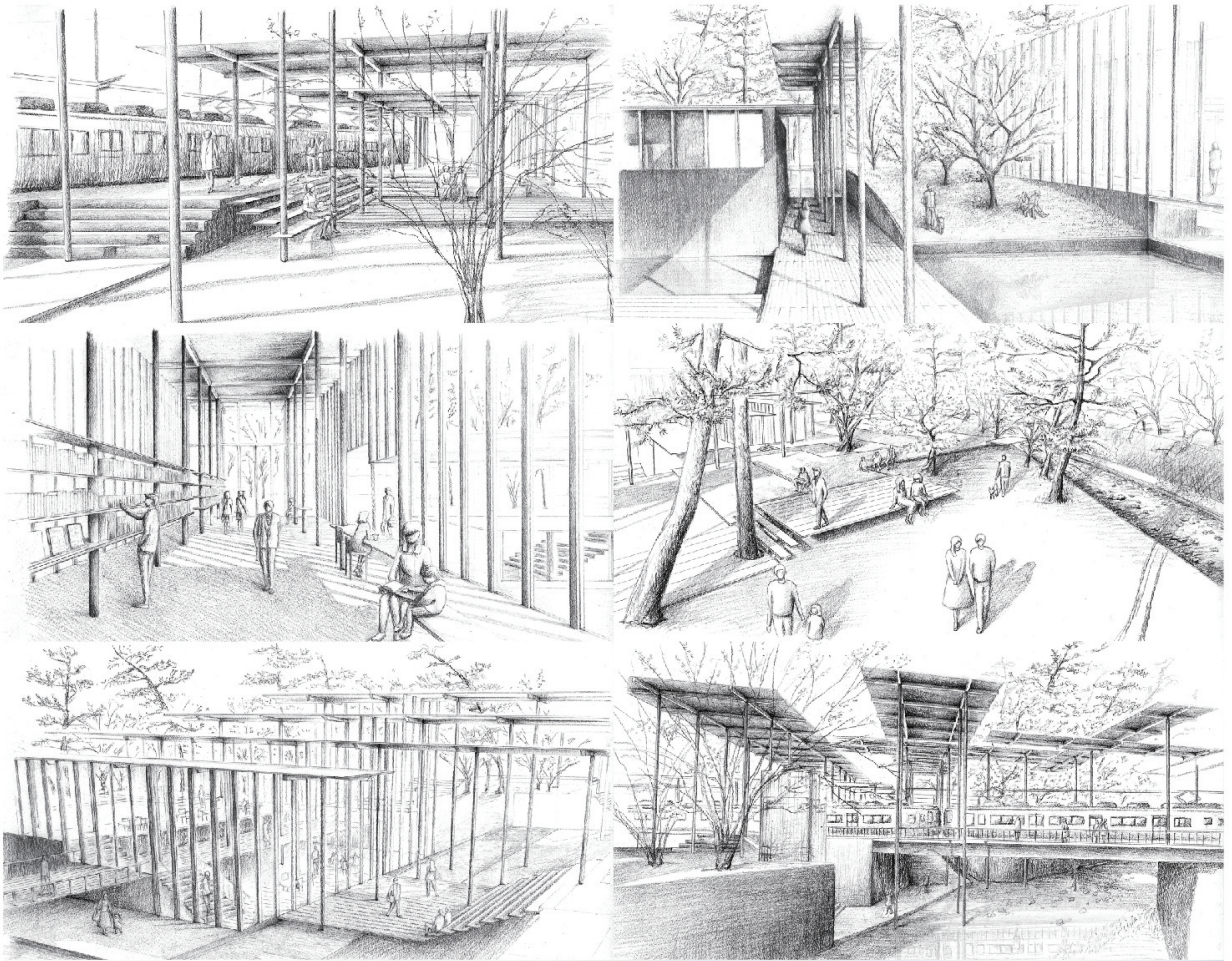
しかし、駅の現状はどこにいても似通った姿、プログラム。
土地らしさは消え失せ、機能が狭い敷地の中に押し込まれている。

駅と文化的活動が行われる施設を余裕を持たせ繋ぎ、駅を単なる交通機関ではなく、

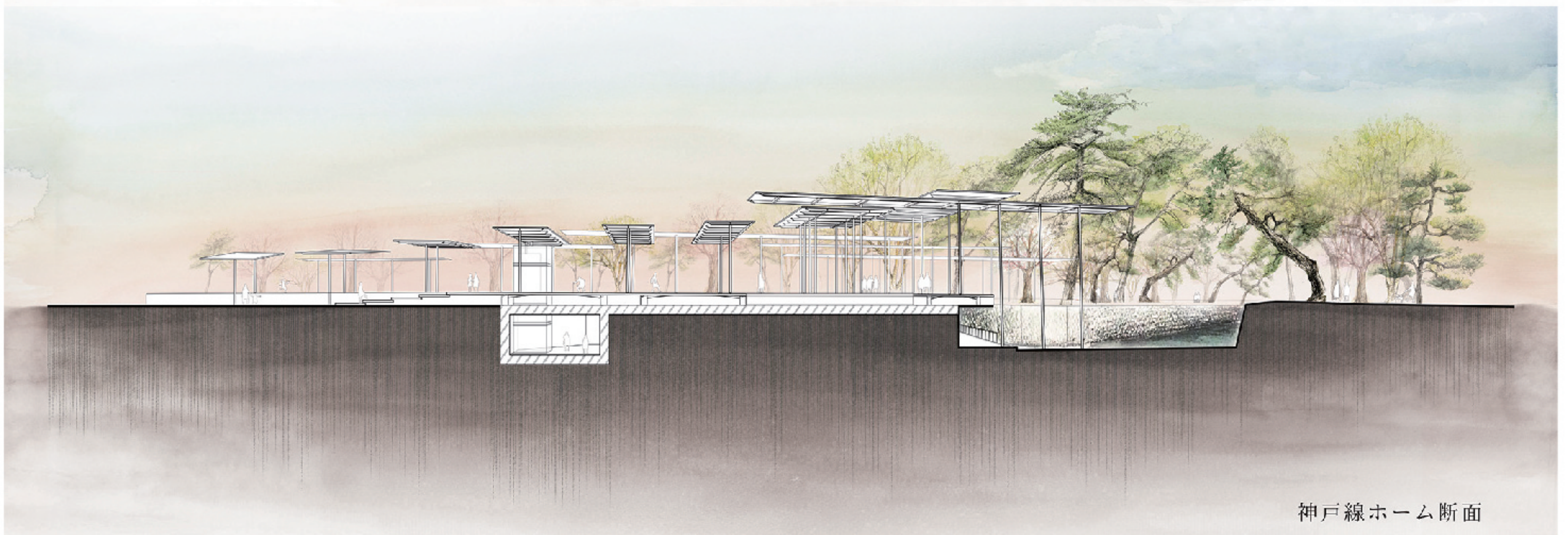
コミュニケーション、文化的活動の場とする。



ホール断面



資料スペース断面



神戸線ホーム断面

神戸大学建築卒業設計賞 木南賞

日向神峡の間

- ダム湖の出現により浸水した峡谷と人との縁結び -

馬場智美（遠藤研究室）

その昔、日向の神さまがそのあまりの美しさに舞い降りたという伝説の残る峡谷、秘境・日向神峡。人々と日向神峡の間に長い歴史をかけて結ばれた縁は、63年前のダム湖の出現によって切られてしまった。

浸水した峡谷に、水があるからこそ実現する日向神峡の空間的魅力が凝縮された空間を提案する。ダム湖沿いに計画した二つの建築は峡谷における「門」とクライマックスにあたる「本丸」になり、対照的な性質をもつ二つの建築によって峡谷全体が一つになっていく。



・ダム湖の出現により浸水した峡谷と人との縁結び・

日向神峡の間

ひゅうがみきょう あいだ



岬の展望台 - 峡谷の門 -

ダム湖の対岸に、峡谷の門と本丸となる二つの建築を設計する。門と本丸は水で結ばれる。

奥日向神のゲストハウス - 本丸 -

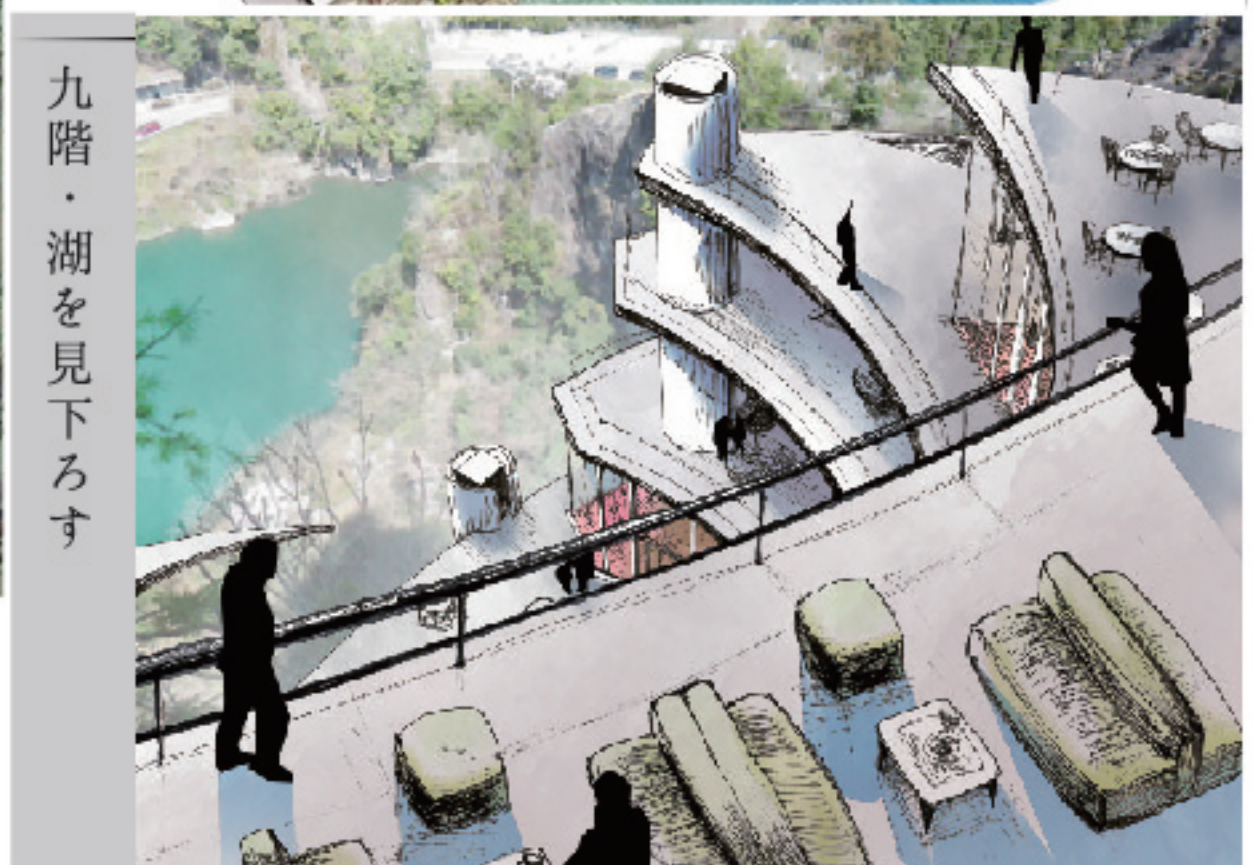
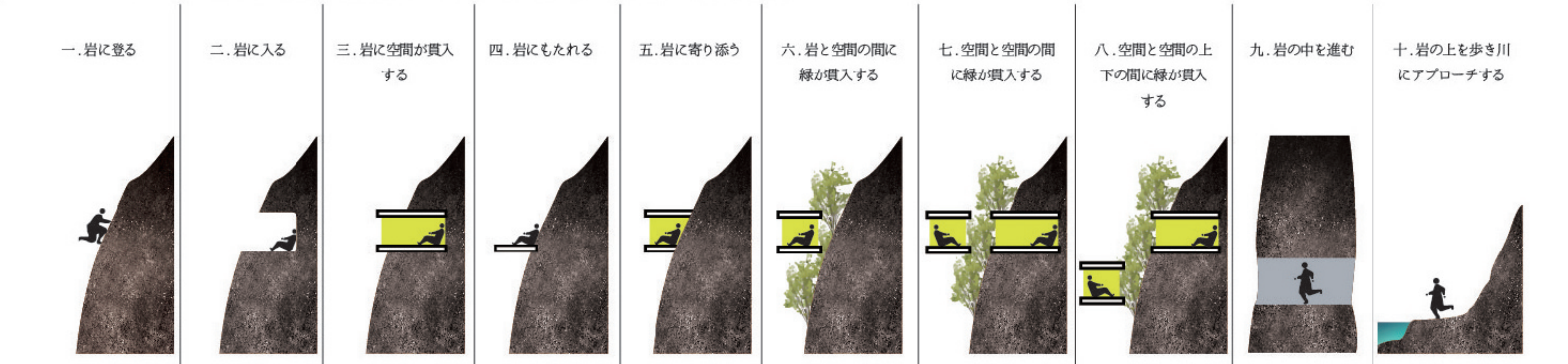


日向神ダム

1. 岬の展望台 - 年間水位変化 28M を利用した展望台 -



2. 奥日向神のゲストハウス - 岩と緑と水に関する空間 -



神戸大学建築卒業設計賞 優秀賞

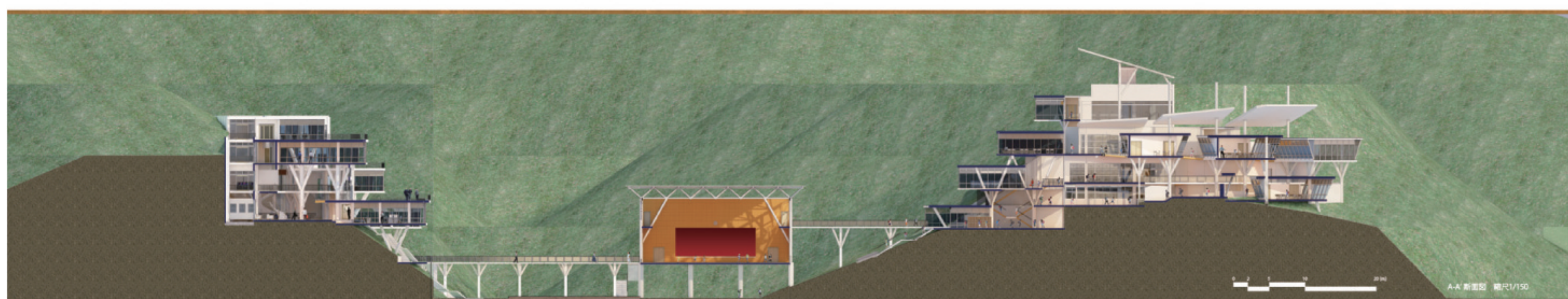
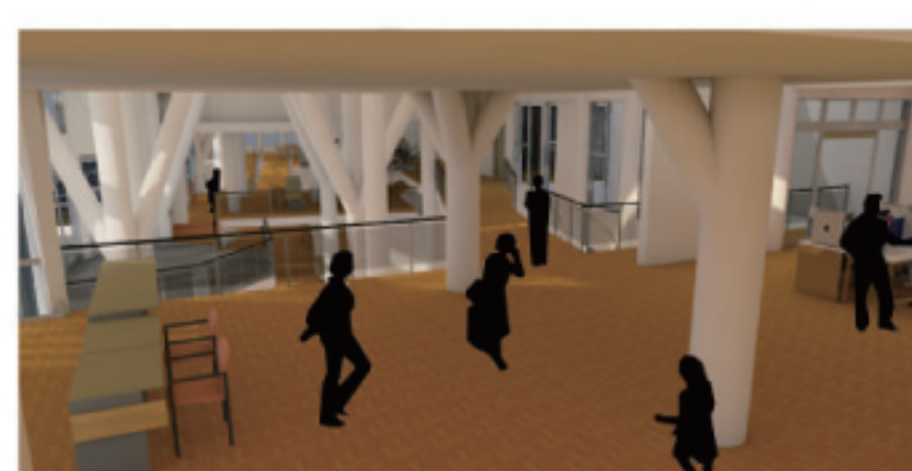
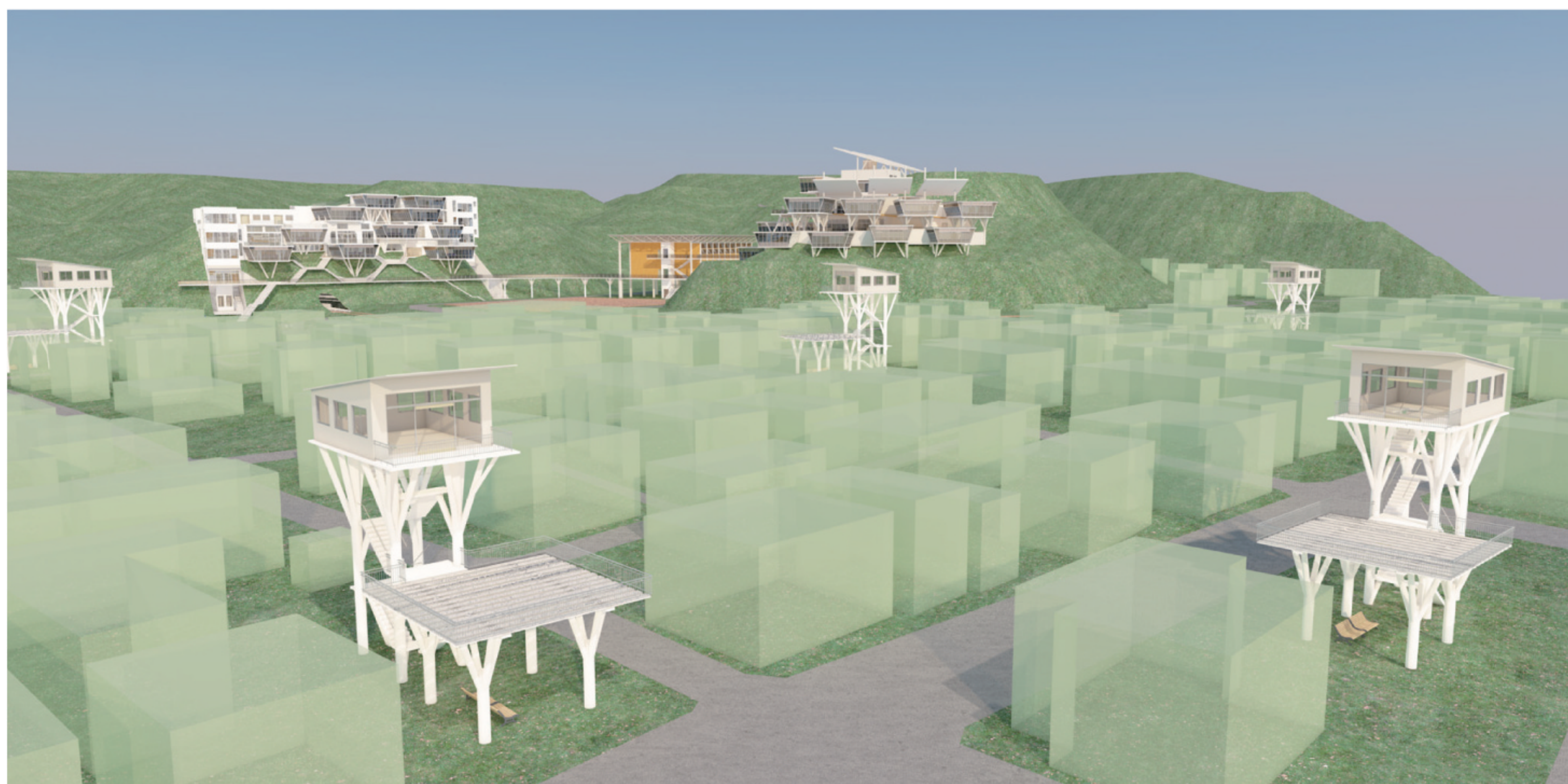
群生する樹の町

－潮騒のまち串本における役場・小学校小学校の斜面地移転と点在する樹状避難小屋－

池田明德（北後研究室）

本州最南端の串本町では近年発生が確実視されている南海トラフ地震に伴う津波で甚大な被害を受けるが高台の土地は既に不足しており、低地の役場や小学校は移転先がなく行き場を失っている。また、市街地には低層の建物ばかりで住民の避難可能距離内に避難先はない。

串本を津波から救うための広域的な低地の避難小屋と斜面地に建つ公共施設の提案をする。



神戸大学建築卒業設計賞 優秀賞

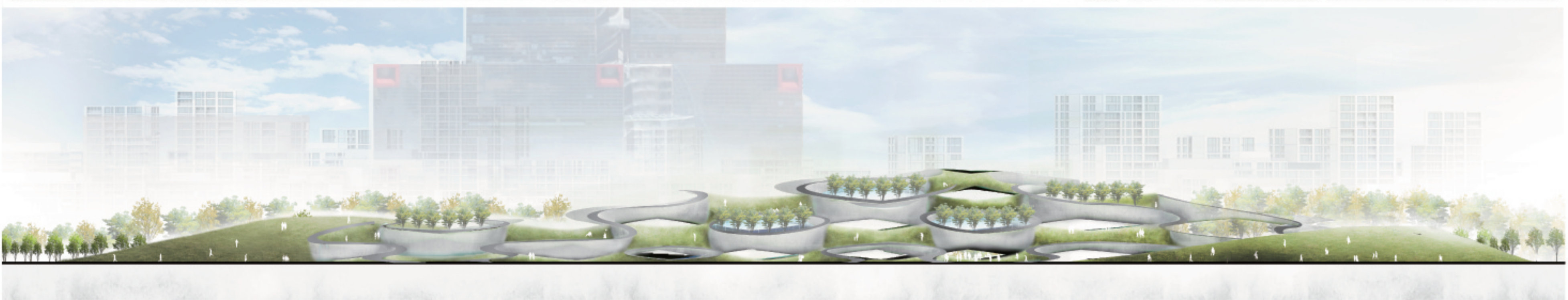
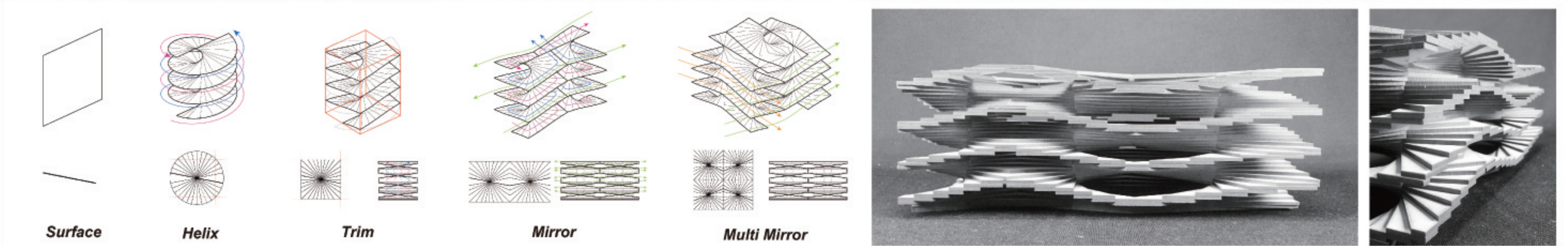
滲出する哀惜
ー都市における死の価値観を民主化する葬祭空間の設計ー

谷大蔵（遠藤研究室）



現代の都市での人の死を取り扱う環境は多様化している。ビル状の墓地、直葬など時代の生活の変化に合わせ、多様に”進化”しているとも言える。しかし、かつての葬列のように人の死が都市に顕在することはなく、ゴミの処理同様、生活から隔離・隠蔽されてしまっている。

生の日常と死の非日常が表裏一体で存在し、その複合状態が生を実感させ、死を認識させる都市の新たなインフラを提案する。



2015 年度卒業設計発表会

審査講評

三輪康一
神戸大学大学院教授 審査委員長



発表会での質疑応答の後、まず、審査員による一次投票の結果、佳作以上に相当する賞選考対象作品として 12 作品が選出されました。つぎにこの 12 作品について学生の補足説明が行われた後、二次投票を行い、上位 4 作品に追加投票による 1 作品を加えて上位 5 作品を受賞候補対象作品としました。これら 5 作品について再度の質疑応答の後、三次投票を行い、1 位を大賞または木南賞候補としましたが、2 位については確定できず、その後、再三の投票でも 2 作品が拮抗したため、建築学科長の判断で、特例的に木南賞を 2 点とすることとし、すでに候補として決定した 1 作品と同数 2 位の 2 作品について四次投票を行い、大賞候補 1 作品、木南賞候補 2 作品をようやく選出しました。そして後日、これら卒業設計賞の候補作品は、建築学教室の教室会議で正式に各賞に決定しました。

大賞となった塚越仁貴くんの作品「久遠の環―神戸・布引ダムの転生―」は、近代化遺産である布引ダムと周辺のリニューアルをめざすもので、建築に対する新たな提案というよりも、明快な 2 つの軸線のもとで凝縮された形たちが緊張して向かい合う、平面・断面構成、表現力ともに完成度の高い作品で大賞にふさわしいものでした。木南賞の仲川絵里さん「移ろいを彩る―夙川における駅の在り方―」は鉄道駅と河川が交差する場所で駅の本来もつ交流拠点としての役割を見出す作品。作品に漂うリアルな軽さにこの場に引き継がれるべき阪神間モダニズムの精神が見え隠れします。同じ木南賞の馬場智美さん「日向神峡の間―ダム湖の出現により浸水した峡谷と人の縁結び―」は、ダム湖に接して 2 つの建築を挿入する。ひとつは垂直に、ひとつは水平に、向かい合う両者が環境にどう応じるかを問いかけています。優秀賞の 2

作品のうち、池田明徳くんの「群生する樹の町―潮騒のまち串本における役場・小学校の斜面地移転と点在する樹状避難小屋―」は、津波からの避難のため、低地の避難小屋と連携する斜面地の公共施設の組み合わせを提案するもので、現実の課題を踏まえたある種のリアリティをもつ作品。樹のメタファーが造形として救いにつながることに成功しているように思えます。もうひとつの優秀賞、谷大蔵くんの「滲出する哀惜―都市における死の価値観を民主化する葬祭空間の設計―」は、表題の難解さはさておき、都市のなかに、日常から離れた異質な空間を用意しています。果たしてこの空間が葬送の場でなければならないかと問いかけることがこの作品のねらいなのかもしれません。

発表会や選考会での議論を通じて思うことは、自ら場とプログラムを設定し、空間化する卒業設計という一連のプロセスにとって、社会的なつながりのなかで、それぞれの場に建築が存在することの意味について考えることはとても大切なことだということです。これから卒業設計をめざす学生のみなさんもこうした論点について普段から考えてみてほしいものです。



会場：神戸大学百年記念館六甲ホール

審査委員

三輪教授を審査委員長とし、選考会選考委員は計画系の全教授 6 名（遠藤、黒田、末包、北後、三輪、山崎）、准教授 4 名（大西、近藤、梶橋、中江）、寄附講座客員准教授 1 名（光嶋裕介）・特命准教授 1 名（福岡）

および当日全作品の発表を見て頂いた多賀教授 1 名、ならびに選考会参加を受諾いただいた非常勤講師 5 名（設計系演習担当：山隈直人、竹口健太郎、寺岡宏治、大谷弘明、近井務）の計 18 名とした。

得票数一覧

氏名	卒業研究 題目	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	最終結果
塚越 仁貴	久遠の環―神戸・布引ダムの転生―	9		9				11	大賞
馬場 智美	日向神峡の間 ―ダム湖の出現により浸水した峡谷と人の縁結び―	9		7	6	8	7	4	木南賞
仲川 絵理	移ろいを彩る―夙川における駅の在り方―	5		7	8	9	7	3	木南賞
谷 大蔵	滲出する哀惜 ―都市における死の価値観を民主化する葬祭空間の設計―	7		7	4				優秀賞
池田 明徳	群生する樹の町 ―潮騒のまち串本における役場・小学校の斜面地移転と点在する樹状避難小屋―	4	6	6					優秀賞
坂口 大賀	うつわ―瀬戸陶土美術館―	4	5						佳作
向久保 沙耶	アートに集う―可変的空間を有する芸術施設計画―	4	4						佳作
瀬川 瑞	書美の表象 ―書を空間として認識する美術館の提案―	4	3						佳作
後藤 沙羅	ふたたびの谷 ―京田辺市虚空蔵谷における芸術の拠点―	3							佳作
黒田 知沙	ネコロジ ―神戸市長田区における地域猫と共に暮らす集合住宅の提案―	2							佳作
堀内 啓佑	蚕都、生命の憑代 ―信州上田における人と糸のいとなみを紡ぐ場―	2							佳作
宮崎 信	都市の鏡―神戸三宮駅前再編へ―	1							佳作

※棄権1票 ※棄権3票
無効1票

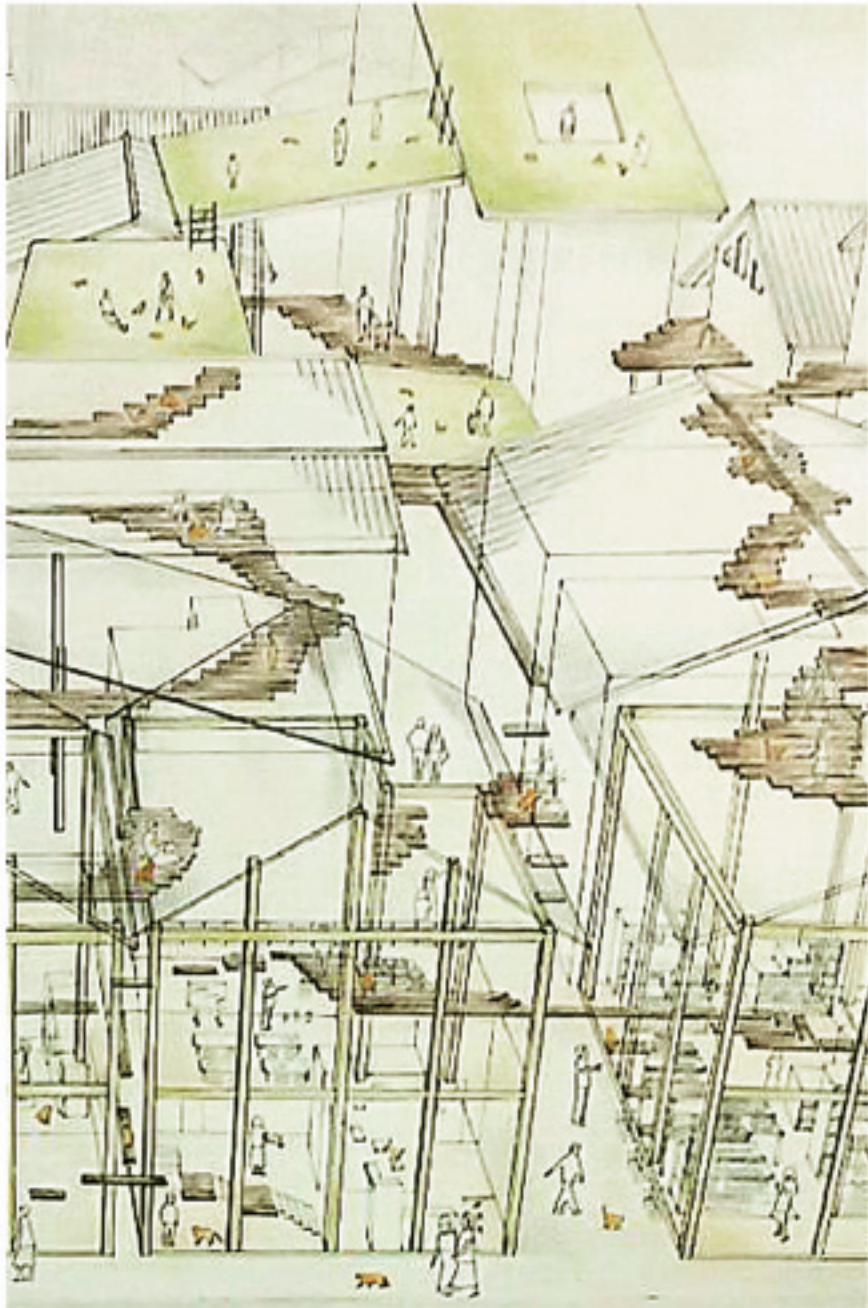
神戸大学建築卒業設計賞 佳作

ネコロジ

－神戸市長田区における地域猫と共に暮らす集合住宅の提案－
黒田知沙（三輪研究室）



近年ヒト同士のコミュニケーションの希薄化が一層問題視されてきています。そこでネコを介して新たなコミュニケーションを図ることが出来る、ネコミチを挿入した集合住宅を提案します。高齢化が進む神戸市長田区において、ネコとマチの新しい関わり方として“地域猫”という新たな関わりを導入し、ネコミチを基に住宅内に公共空間を挿入することで、ネコを追いかけていくうちにヒトの内と外の境界が緩やかに繋がっていきます。ネコに導かれて辿りついた先では、どんなヒトたちが出会い、どんな交流が生まれるのでしょうか。



ふたたびの谷

－京田辺市虚空蔵谷における芸術の拠点－
後藤沙羅（末包研究室）



宅地開発を免れ本来の地形をとどめる、京都府京田辺市虚空蔵谷。この谷を通りぬける時、人は日常とは異なる時間・空間を体験しながら池から川を上流に向かい、滝へとどり着く。この非日常的な空間体験を芸術の体験と結びつけ、谷空間をアプローチとし芸術の鑑賞や体験の場からそれらがつくられる場、アーティストが滞在する場、人々が集う場まで、谷で水源を求めたように芸術の源流をたどり、もう一度谷へと帰るまでの“みち”としての建築を提案する。生活の場のすぐ隣に現存する谷を少し奥へ引きのばし、ふたたびの谷を呼び起こす。

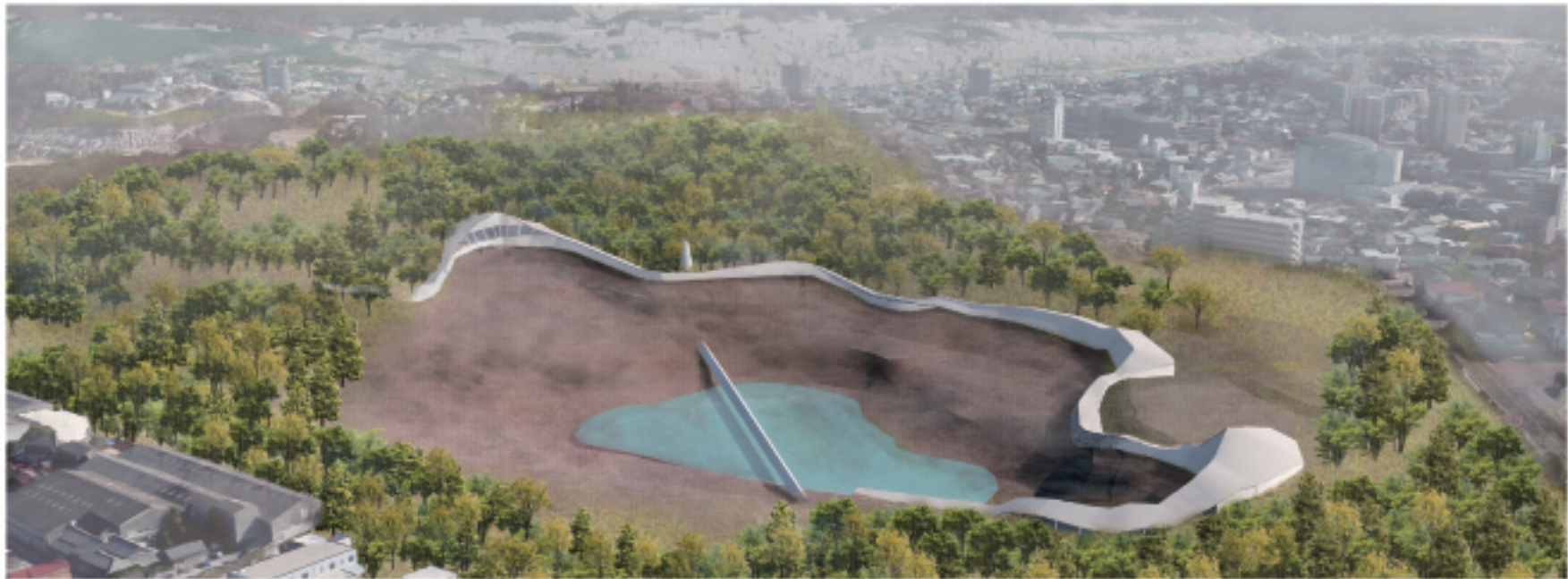


うつわ－瀬戸陶土美術館－

坂口大賀（山崎研究室）



1300年のやきものの作りの歴史を持つ愛知県瀬戸市。市の中心にある広大な採掘場跡は現在、埋め戻しの計画が進んでいる。採掘場を埋めるべき穴ではなく土地のコンテクストとして捉え直し、採掘をすることで生まれた地形・作品を体感できる陶土美術館を計画する。陶土美術館により採掘場は生業の記憶を留めるうつわとなり、人は産業の光と影の記憶を見つめる。



書美の表象

－書を空間として認識する美術館の提案－
瀬川瑞（中江研究室）



書の美とは、一体どんなものか。日本芸術において、最も抽象的で奥の深い、書の芸術性を抽象化して解いていく。空間として美しさが表象された場所を歩くと、より深くより豊かに書の魅力を理解できる。美の観点から形態考察を行い、書が体感できる空間構成を実現する。

近年、デジタルの発展などにより、文字を書く、筆に触れるという機会が減ってきてしまっており、全国の書道人口は減少の一途を辿っている。書道の新しい試みが多くなされている今、この状況を変えていくための拠点が必要である。そのための書道美術館を設計する。



神戸大学建築卒業設計賞 佳作

蚕都、生命の憑代

－信州上田における人と糸のいとなみを紡ぐ場－

堀内啓佑（中江研究室）



明治から昭和初期にかけて蚕糸の一大生産地、研究都市として栄えた長野県上田小県地域では多くの人々が糸と関わり合いながら生きてきた。しかし、国内蚕糸蚕業の衰退に伴って人と糸の間の営みは姿を消してしまった。一方で、この地域は国内で唯一の繊維学部をもつ信州大学を中心に繊維研究の先進地として注目されつつある。養蚕のための伝統的な農具である「藁簇」から、器具特有の「憑代」としての役割、構造的特徴を抽出し、また上田地域において蚕糸業がもった社会性を建築に落とし込みながら、人と糸の営みを再び紡ぐ場を計画する。



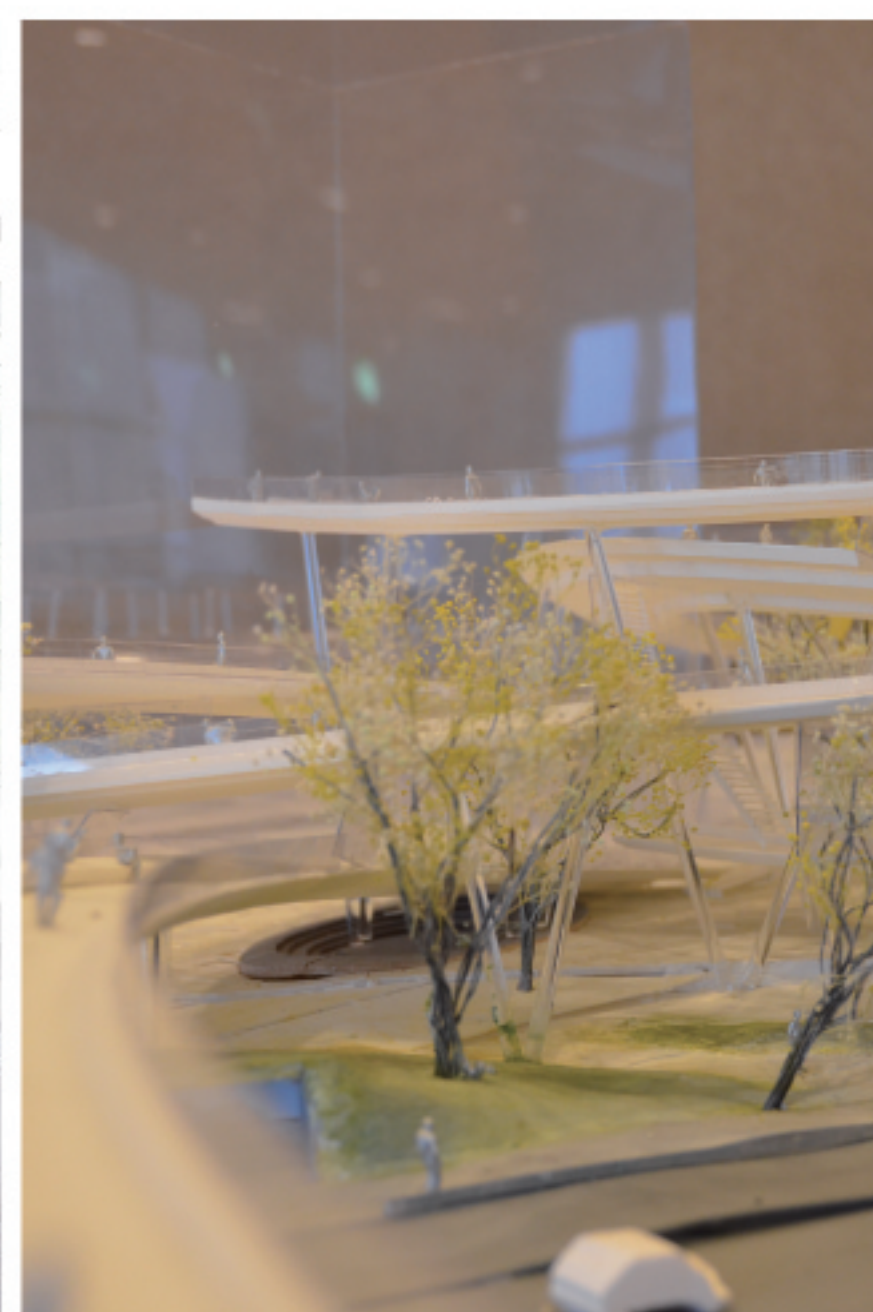
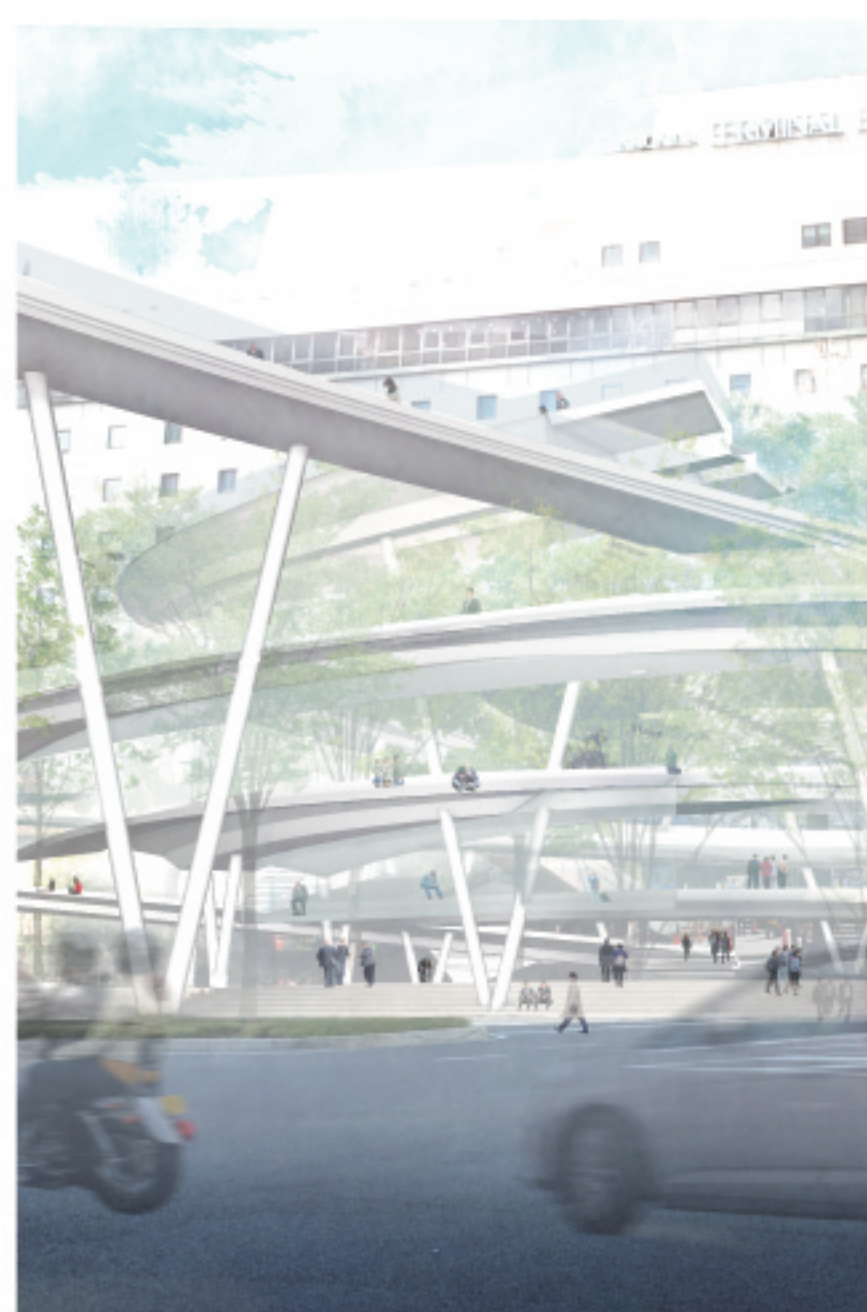
都市の鏡

－神戸三宮駅前再編へ－

宮崎信（末包研究室）



都市の焦燥に違和感を覚える。利便性を追求し建築というよくできたハコは人を内部に留め、都市空間はハコからハコへの移動のための場所ではない。もっと人間的で自由な、余裕のある場所になるべきではないか。この街に訪れる誰もが足を踏み入れる駅前空間を「都市の鏡」と捉え、人のための動線と居場所が一体化した都市の中で憩える場を設計する。



アートに集う

－可変的空間を有する芸術施設計画－

向久保沙耶（山邊研究室）



古来アートは信仰や社会統治に用いられ、その鑑賞空間は神聖なものとされてきた。一方現代においては過去のような神格化されたアートの姿はなく、市民参加型のアートの誕生などその形式は多様化している。にもかかわらず、その鑑賞空間が依然敷居が高く限定的であることに疑問を感じた。もっとわたしたちの生活に溶込むようなアートの空間は提供できないか。多様化したアートに対応する可変性と、アートと日常の一体化を可能にするミュージアムを模索した。仮設的な可変要素のある、駅とミュージアムの複合空間の提案。



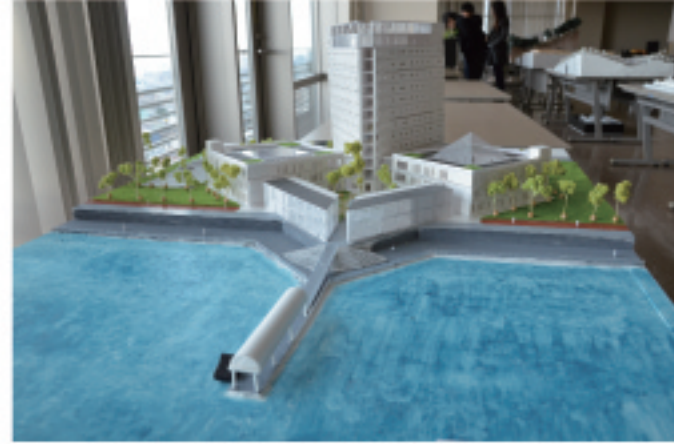
■卒業設計発表会の様子



神戸大学卒業設計 作品紹介

Marine Odyssey 2050

阿部 俊明（槻橋研究室）



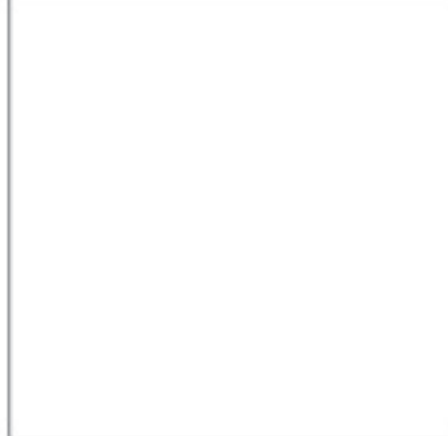
赤瓦を望む

—倉吉・打吹玉川、人・時・場所の結び目—
粟根 悠太（山崎研究室）

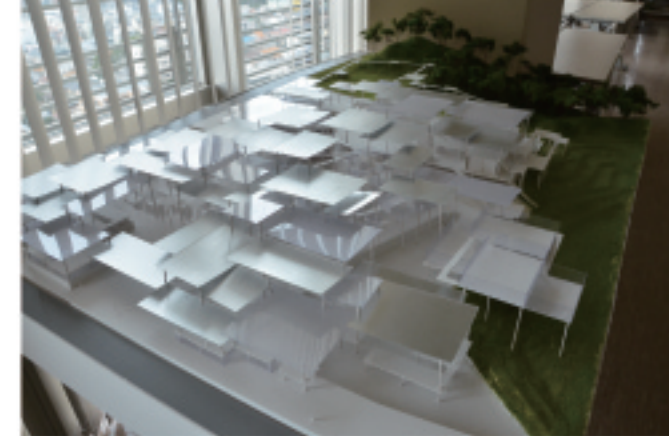
西宮Rurban Garden

—工場跡地における農を通じた都市再活性化の提案—
家入 健（山崎研究室）

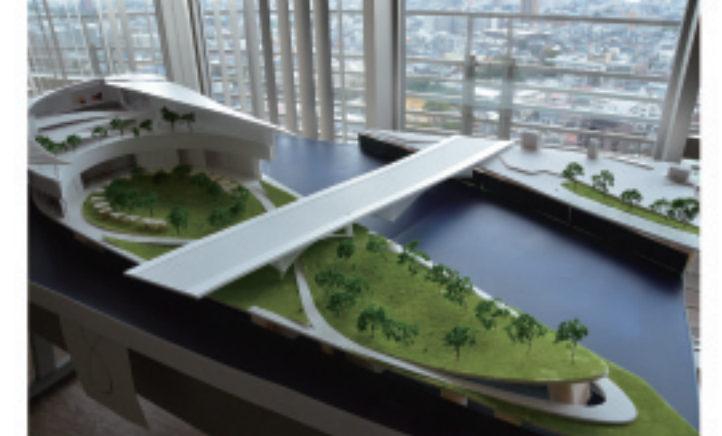
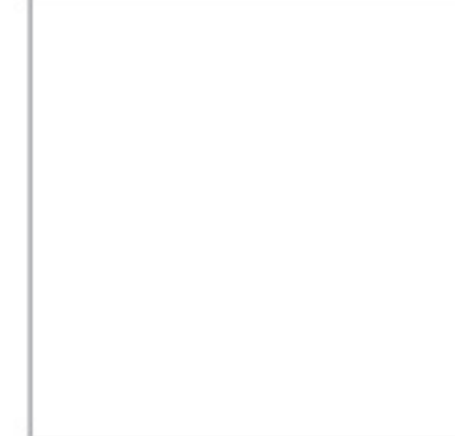
君と共に

—滞在型産前・産後ケアセンターの提案—
池田 みさき（遠藤研究室）

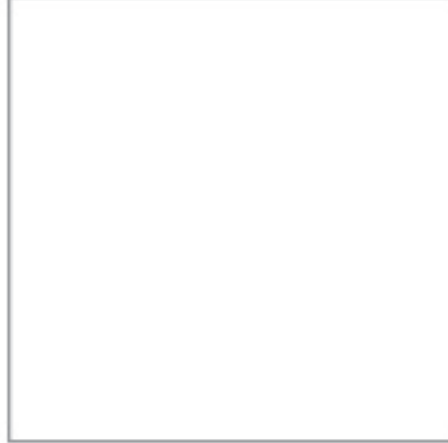
0、世界に拓く新たな結合

—研究開発型企業が集う交流施設—
石川 雄大（黒田研究室）

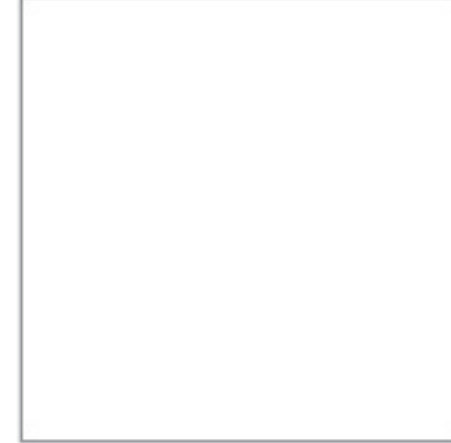
中之島ふるさとミュージアム

—水都大阪の新たな文化拠点として—
岡野 さくら（山崎研究室）

伝わる場所

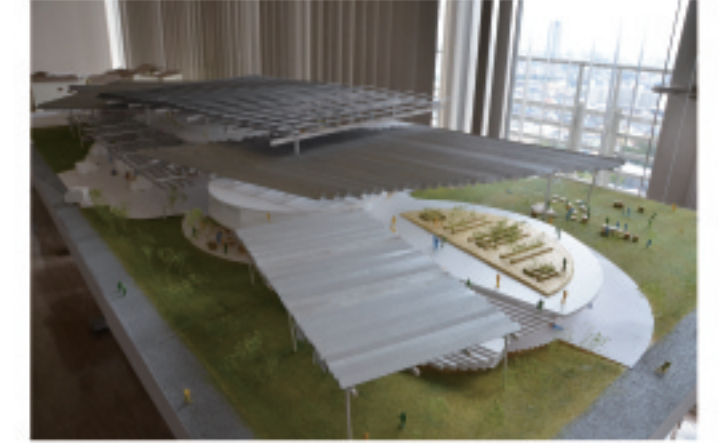
—商いから職へ—
小津 彩夏（近藤研究室）

新旧繫路

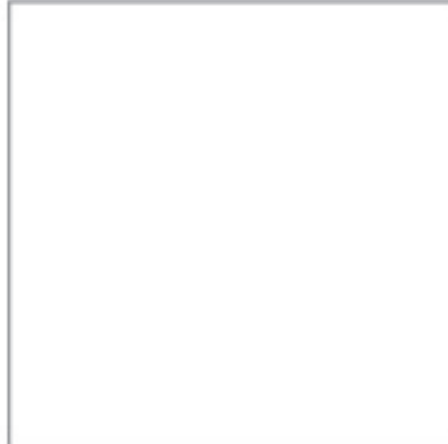
—高岡市の歴史をたどる観光拠点施設—
唐木 拓己（黒田研究室）

食祭に集う

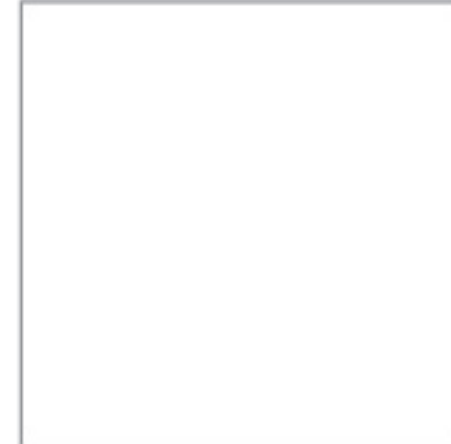
小畑 皓平（槻橋研究室）



blow it up

—しぼんだ風船とふくらむ行動体験のはなし—
塩谷 沙織（中江研究室）

Ad - lib Play Par

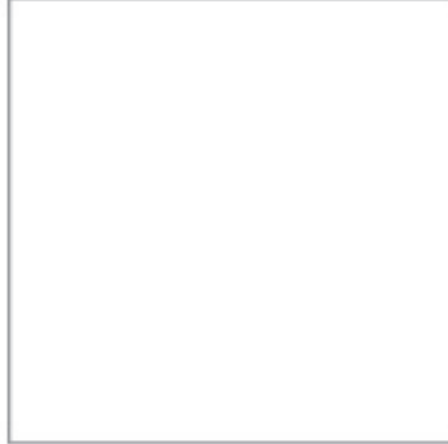
—高羽川におけるこどもと地域のための可変型あそび場インフラストラクチャー—
武田 慎太郎（三輪研究室）

ケモノミチ

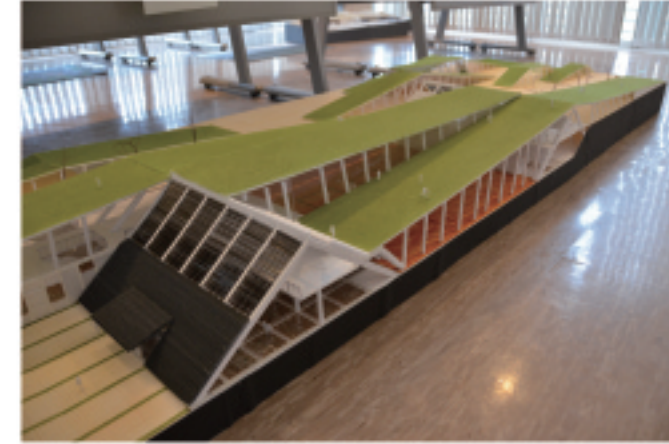
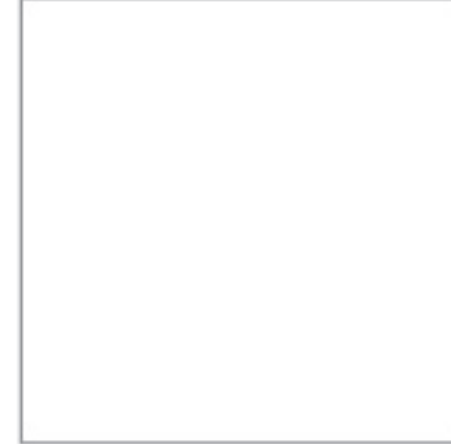
田中 はつみ（槻橋研究室）



KITAZA

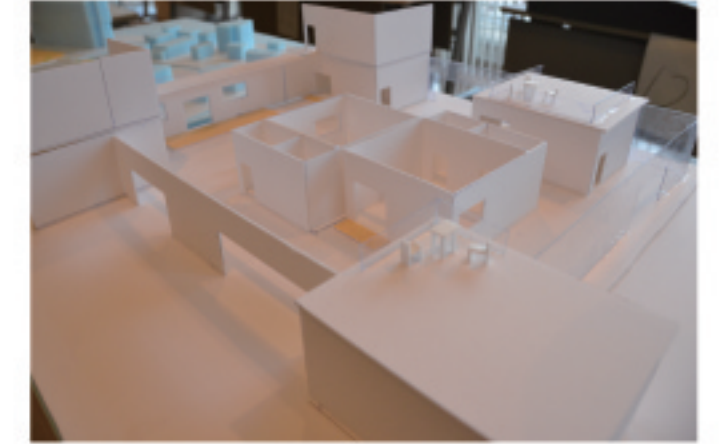
—京都と海外を織り成す舞台—
田中 宏幸（北後研究室）

歴史の畝に

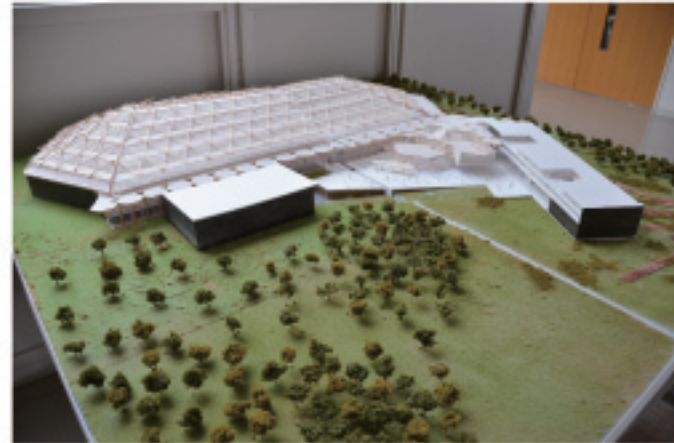
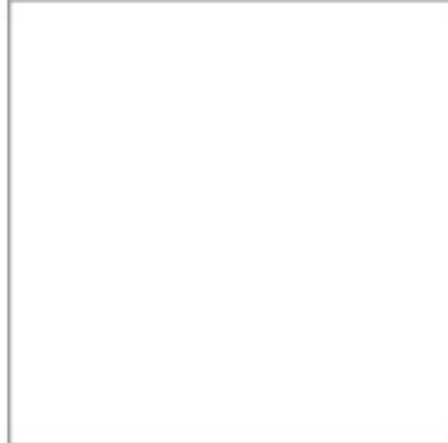
—橿原のまちと自然にとけこむ運動公園の提案—
中村 大樹（三輪研究室）

都市の中の終の棲家

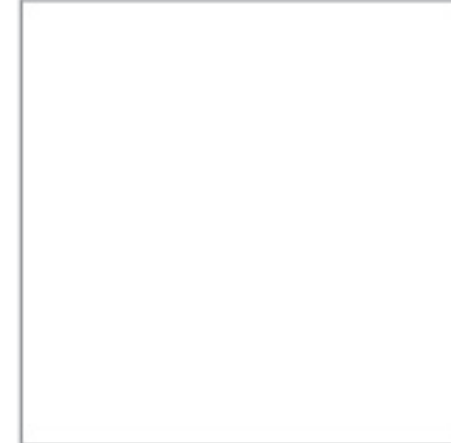
西村 卓馬（松下研究室）



ICE HILL

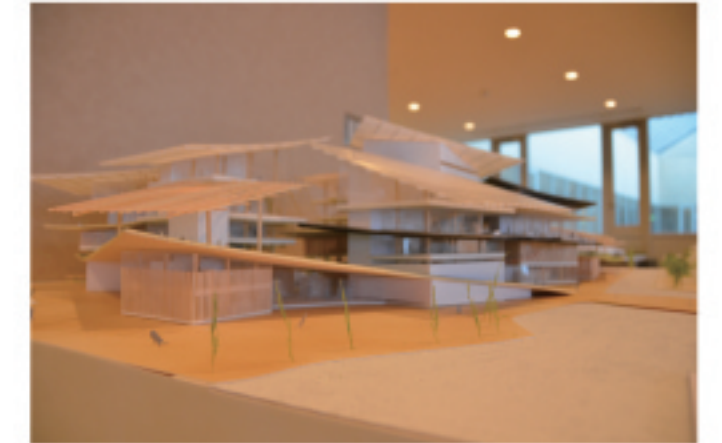
—瀬浜における氷上競技のナショナルトレーニングセンター計画—
濱崎 遼（大西研究室）

地形が織りなす新たな風景

—広島県尾道市における小学校—
増成 唯（末包研究室）

日本再考

三井 貴裕（槻橋研究室）



R×R=R

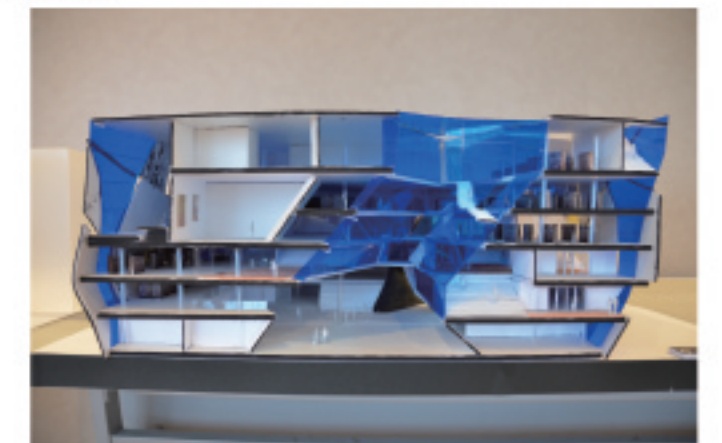
—鶴見緑地公園における図書館を中心とした空間—
湊 大地（大西研究室）

めぐりの縁

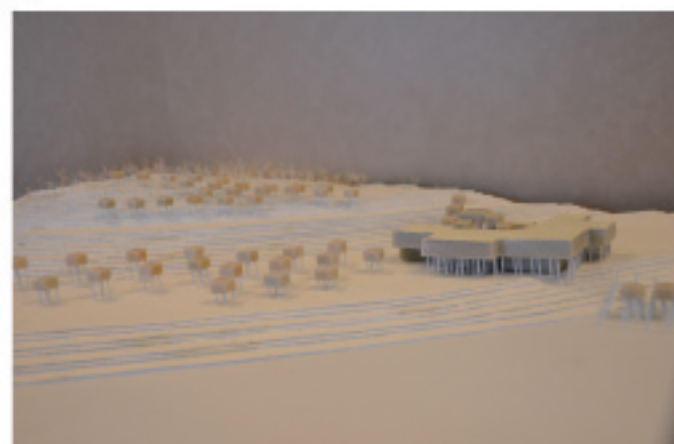
—大美野住宅地におけるこどもを中心としたコミュニティの再生—
森 優也（三輪研究室）

都市の居場所

山岡 義大（松下研究室）



干潟(ガタ)へ

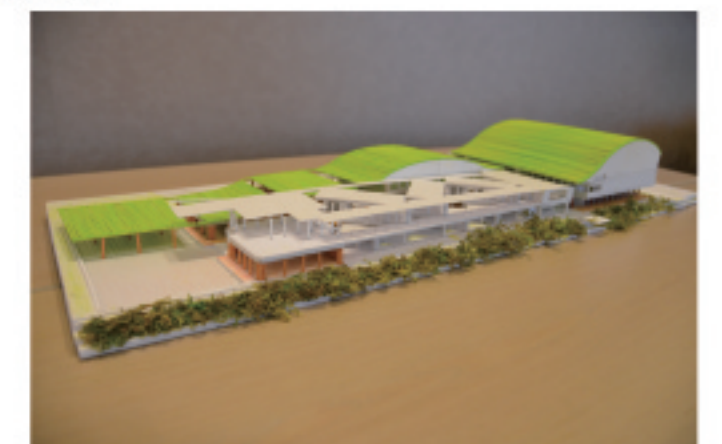
—肥前七浦海岸における学習・宿泊施設—
吉澤 賢（中江研究室）

都市に鎮座する静寂

岩見 健吾（槻橋研究室）



おやこのじかん

—生活動線の整理による親子の時間の創出—
濱本 拓弥（黒田研究室）

2016 年度卒業設計発表会

作品講評

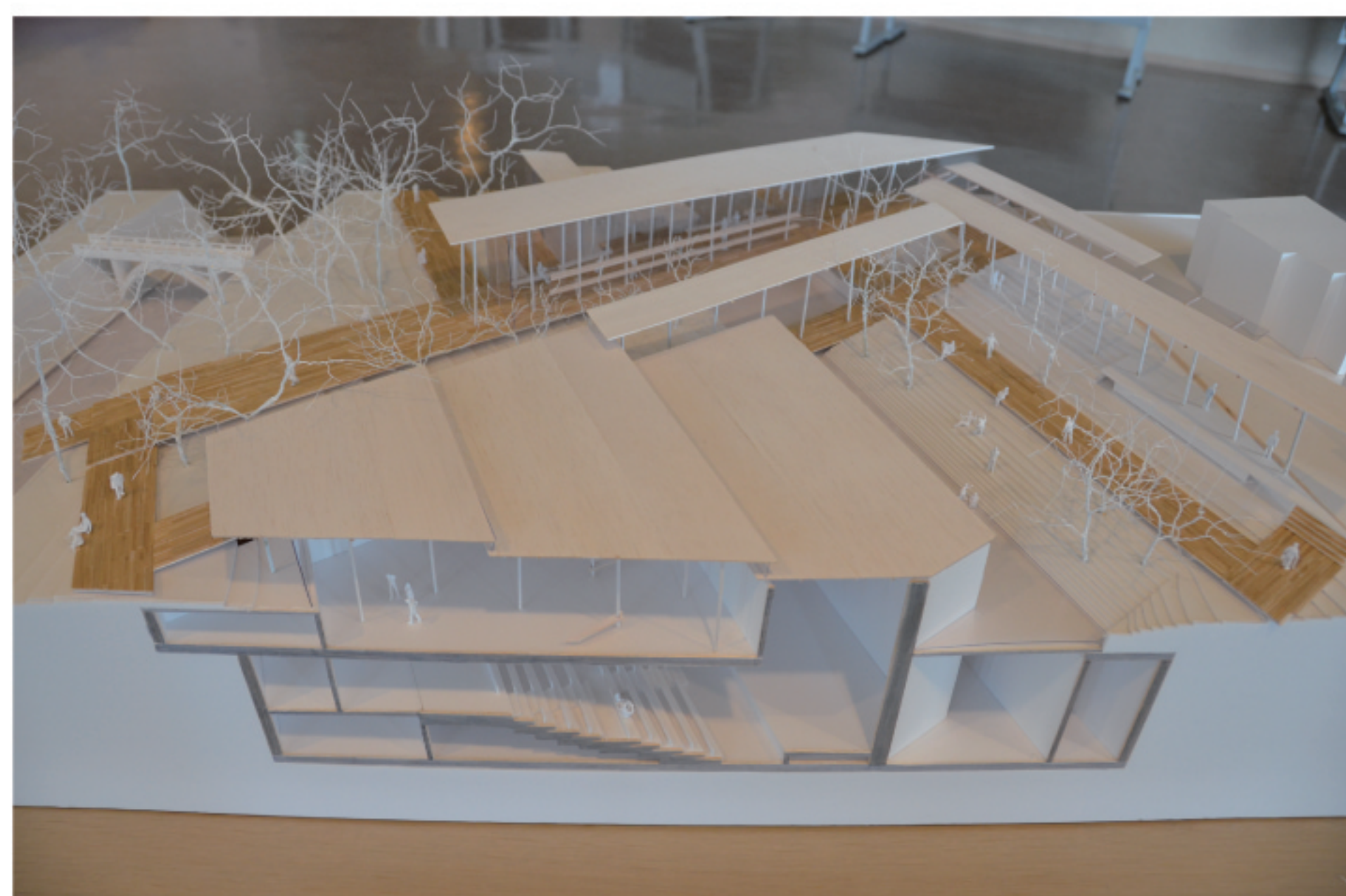
大賞

久遠の環 ―神戸・布引ダムの転生―



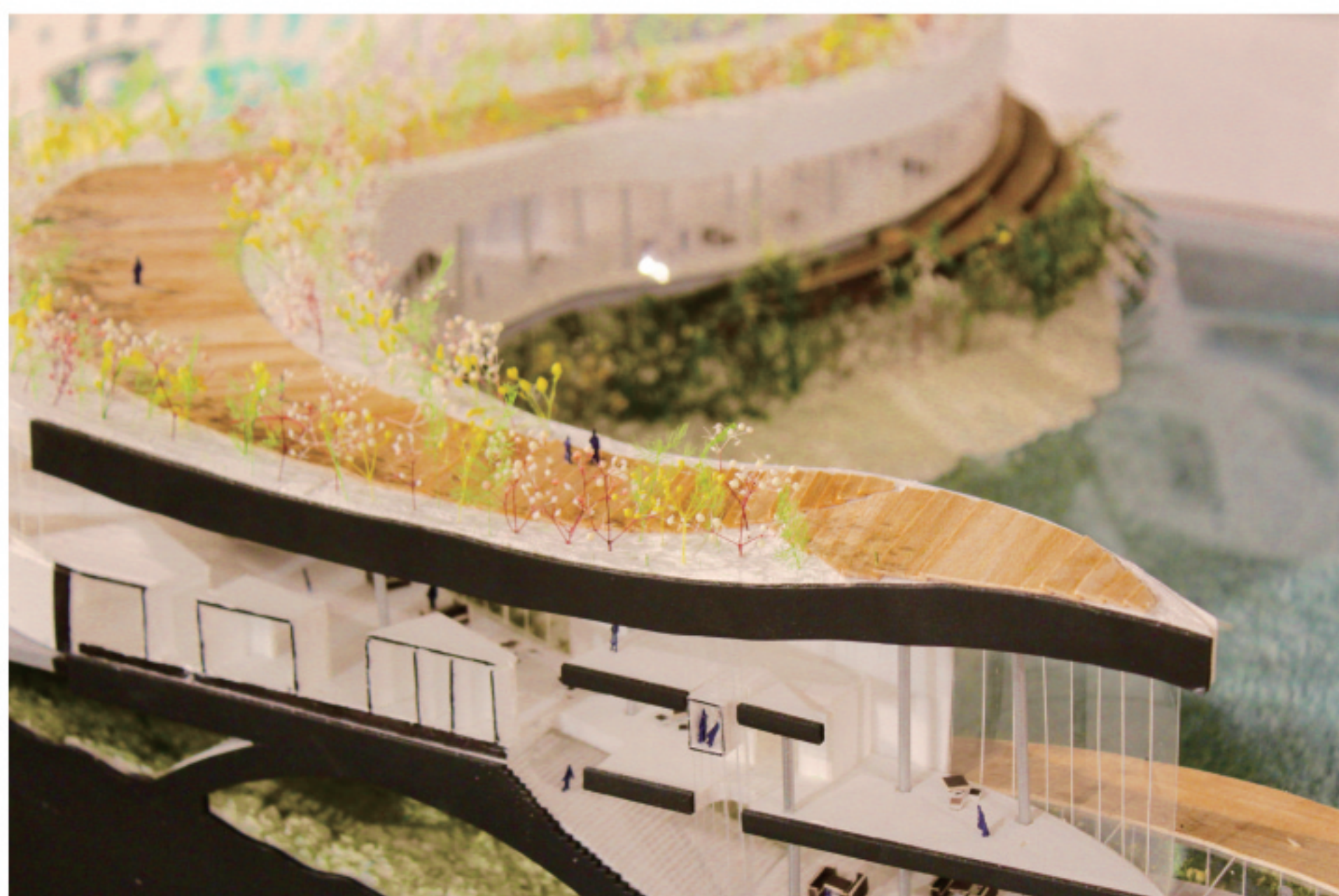
木南賞

移ろいを彩る ―夙川における駅の在り方―



木南賞

日向神峡の間 ―ダム湖の出現により浸水した峡谷と人の縁結び―



塚越仁貴（遠藤研究室）

神戸市北部に位置する、明治期の近代化の遺産でもある布引ダムが生み出すダム湖を敷地として、近未来を前提に計画されたものである。日本で最初のコンクリート式重力ダムとしての神戸市への給水源として重要な役割を長らく担ってきたが、近年の給水技術では上下の制御から水平方向への制御にかわり琵琶湖から水を送り出すようになっている。ダム湖には風倒木や土砂が流れ込み持続的に大きなエネルギーをかけながら維持しなければならない宿命がある。しかし、別の可能性として、給水機能の役割を終えた時には新たな役割が生まれる、そのための提案である。この提案は満水時の水位を体感するための遊歩道とダム堤体と向き合う建築とで成り立っている。ダム堤体と直角の軸線上に配置された建築にはやや強すぎる表情を感じるが、あえて強い構成を採用しているのは、巨大ではないが布引ダムの持つ歴史とともにある存在感への畏敬の念から発する応答であろう。

審査委員 遠藤秀平

仲川絵理（末包研究室）

再駅は利便性に供するだけでなく、出会いや別れなど人生を様々に彩る場でもある。阪神間を代表する良好な河川景観を呈する夙川。その中央に位置するのが阪急夙川駅である。しかし、夙川駅は周囲を車に占拠され、街との関係も、さらに夙川との関係も閉ざされている。仲川さんの提案は、夙川駅を夙川と一体となった街とすることにある。夙川への意識を誘うよう、あえて振って設定されたグリッドが、部分的に屋内空間としてホールや集会のスペース、ギャラリーやライブラリー等になるが、それらは緑の中に散在され、樹林としての空間的連続性を確保するように計画されている。断面的にも水や緑との関わりが様々な細やかな工夫がなされている。こうした構想のもと、夙川駅は「人々のための街」となるのである。駅舎のデザインや改札システムなどの課題もあるものの、真摯に丁寧に構想の具現化を行ったものとして、大いに評価に値するものである。

審査委員 末包伸吾

馬場智美（遠藤研究室）

近年、卒業設計ではプログラムを様々に掘りさげ、リアリティをもつことが重視されているが、この作品は、プログラムはファンタジックだが、ランドスケープを活かした造形が秀逸であった。ダム湖の自然の造形を注意深くなぞり、スラブと柱を繊細かつ大胆にデザインすることで、第二の自然ともいうべき、なじみながらも人と自然の関係を高める建築を提案した。プログラムの妥当性を超えて、建築が土地に新たな価値を与えることに成功している点を、評価した。

審査委員 竹口健太郎

2016 年度卒業設計発表会

作品講評

優秀賞

群生する樹の町 ―潮騒のまち串本における役場・小学校の斜面地移転と点在する樹状避難小屋―

池田明徳（北後研究室）



南海トラフ地震に伴う津波に短時間で襲われることになる太平洋側沿岸部の町々では、リーダーが奮起して避難訓練を率先して行いその時にそなえようとするが、避難先までの道のりを考えると助かる見通しを持ってないあきらめの気持ちをいだく人々も存在する。そこで、人々に安心感を抱かせる大樹をモチーフに、日頃は地域の人々が集う場所となる樹状避難小屋を点在させ、そこから見通しのきく山側の斜面に災害時に地域救援の中心となる町役場や小学校を配した計画としている。地域の課題を受け止め、将来を展望した作品となっている。

審査委員 北後明彦

優秀賞

滲出する哀惜 ―都市における死の価値観を民主化する葬祭空間の設計―

谷大蔵（遠藤研究室）



二重螺旋を描くプレートを多重に連続させていくという設定ルールの単純さ。しかしそこに生まれる場と風景の複雑にして味わい深さ。実にうまい。扇町公園になじむよう高さを加減させて、あたかも風か水による浸食を受けたように見える、その卓抜な造形。ところがタイトルと趣旨の日本語は変で、哀惜も葬祭もこの空間には関係がない。もっとおおらかに、現在の地味な公園を新時代のパブリックスペースとして再生する、と宣言すればもっと光ったと思う。

審査委員 大谷弘明